

科学する心

幼保小 つながる まなざし 研究会



「つながるまなざし研究会」とは

幼稚園・保育園・こども園等の先生と小学校の先生が、互いの論文を読み合い、実践を見合い、議論し合いながら、子どもたちの「科学する心」を共通言語に「幼保小連携・接続」を考える研究会が「つながるまなざし研究会」です。幼児期に育まれた「科学する心」の主体的な遊びや経験を、学校での深い関心や学びへの興味にどのようにつなげていけるのか。子ども主体の「幼保小連携・接続」の形を、現場の先生方、専門家、そして賛同いただくみなさまと共に研究し、発信していきたいと考えています。



監修者からのご挨拶 (秋田喜代美 学習院大学教授)

文部科学省の「幼保小の架け橋プログラム」では、5歳の4月から1年生の終わりまでの2年間を「架け橋期」と呼んでいます。この2年間は、0歳から18歳までを見通したときに、人生の始まりとして大変重要な生涯の学びの基盤となる時期なのです。「幼保小接続」を考える上で大切なことは、園と小学校の先生が交流をしたり、対話をしたりすること、育てたい姿に共感したり困り感を共有しそしてその足跡を残していくことだと考えます。互いの保育、教育実践を見合いながら子どもたちの「科学する心」の姿を中心に議論を重ねる本研究会を参考に、園と小学校の先生が交流を深め、みなさまの地域の特色を生かした「幼保小連携」の形を見つけていただけることを期待しています。

「つながるまなざし研究会」の活動

つながるまなざし研究会の活動は、2022年9月のキックオフから始まりました。「科学する心」のこれまでの歴史や経緯、ソニー教育財団の研究会として幼保小の接続を考えることの意義や期待について秋田喜代美先生からお話いただいたあと、本研究の方向性の確認を行い、各メンバーの自己紹介と実践事例の報告を行いました。そして、第1～4回まではオンラインで実践論文を読み合い対話する活動を、第5回は実際に園を訪問し、見学のあと園の保育者も交えて第4回までの振り返りを行いました。その後は、メンバーが自発的に園や学校等で、地域の保育者・小学校の先生と子どもの姿や実践について語り合う会・イベントを行なってきました。

「科学する心」とは

- すごい! ふしぎ! と身の回りの出来事に驚き、感動し、想像する心
- 自然に親しみ、自然の不思議さや美しさに驚き、感動する心
- 動植物に親しみ、様々な命の大切さに気付き、命と共生し、人や自然を大切にすること
- 暮らしの中で人、もの、出来事と意欲的にかかわり、ものを大切にする心、感謝する心や思いやりの心
- 遊び、学び、共に生きる喜びを味わう心
- 好奇心や考える心、その心の動きから生まれる創造性や分かった時の喜びを味わう心
- 自分の思いや考えを表現し、考え・つくり出していく楽しさの体験や、やり遂げる心

「科学する心 幼保小つながるまなざし研究会」では、これらの「科学する心」の育ちやつながりについて、保育者と小学校教員を中心に様々な人たち同士で語り合っています。





子どもの姿を語りあう中でつながる

研究会では、教育内容・方法の違いを超えたところで、子どもたちの「科学する心」はどのようにつながっているのか、「科学する心」がつながるために何ができるのかを考えることを目的として、保育者と小学校教師、研究者が共に活動をしてきました。ここでは参加メンバーで2022～2023年度に試みてきた3つの活動をご紹介します。

参加メンバー



監修
秋田 喜代美
学習院大学 教授

講師・コーディネーター
箕輪 潤子
武蔵野大学 教授

講師
寶来 生志子
東海大学 准教授

研究員(小学校)
境 孝
横浜市立立野小学校

研究員(小学校)
野口 卓也
福島市立三河台小学校

研究員(園)
中岡 雄介
京都市立中京もえぎ幼稚園

研究員(園)
藤沢 友香子
認定こども園みどりの森

Phase 1

保育実践論文・教育実践論文を読んで語り合う

第1～4回の研究会では、ソニー教育財団の保育実践論文・教育実践論文を読み、メンバー全員でディスカッションを行いました。保育者と小学校教師が同じ論文を読むことで、お互いの校種へのイメージが変わったり、子どもたちの「科学する心」のつながりが見えてきたりしました。

Step 1: 共に保育実践論文・教育実践論文を読み合う

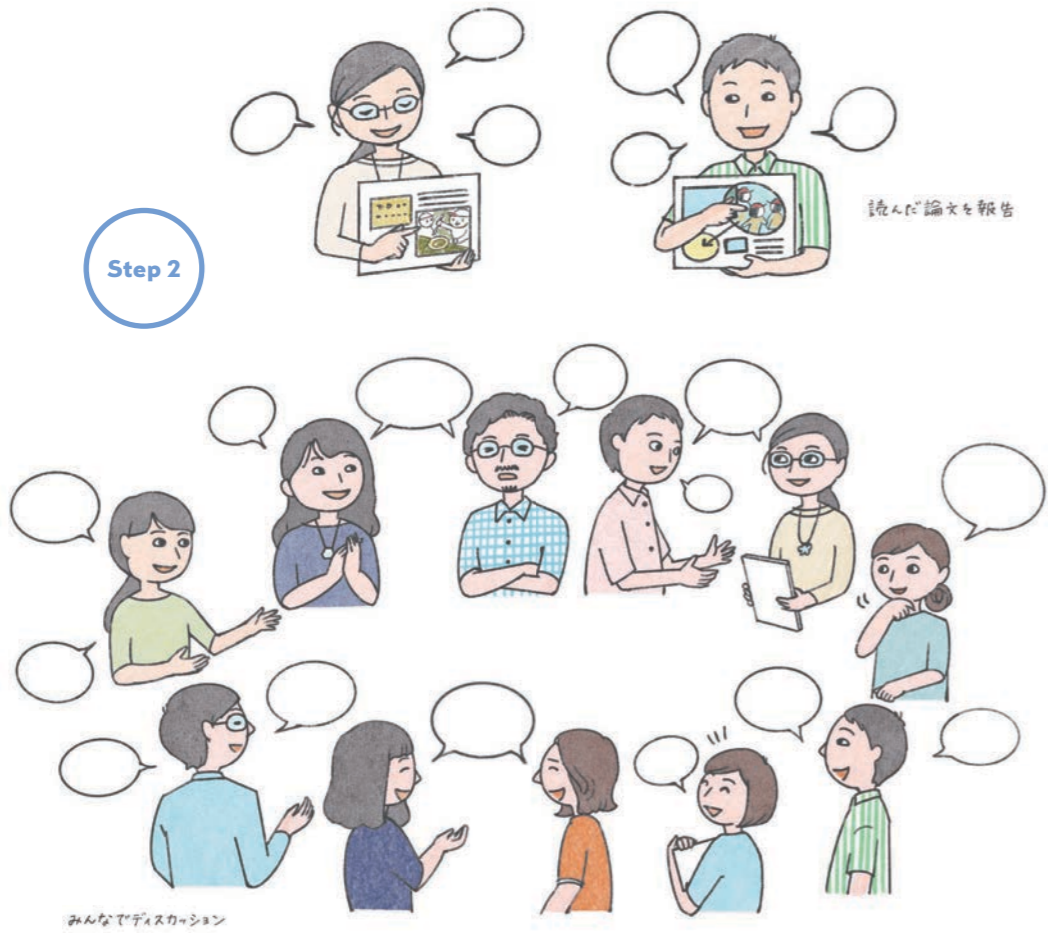
● 事例や内容に共通点がある保育実践論文と教育実践論文を、1回につき1本ずつ読みました。例えば、第1回は「水」、第2回は「自然・ピクトーブ・生き物・地域連携」が論文に共通するテーマでした。報告は、保育実践論文は小学校の教員が、教育実践論文は保育者が担当しました。
● 報告者からの報告内容は、実践論文を読んだ感想や疑問、「科学する心」がつながる鍵となりそうなこと、異校種の先生に質問してみたいこと、論文の内容に関連する自園・自校での実践など、多岐に渡りました。



教育実践論文を保育者が、保育実践論文を小学校教師が読む

Step 2: 発表内容を踏まえて全員でディスカッション

● 実践論文の報告の後、対話を行いました。例えば、保育実践論文・教育実践論文共に「自然・生き物に関わる事例が含まれている第2回の研究会では、「ピクトーブに対していろんな見方ができるようになっていくのが小学生で、学年が上がると知識の量も変わってきます。でも、その知識は幼児期からつながっていますよね。中身のある知識があればあるほど、いろんな疑問も湧いてくるし、知識の使い方も変わってくる」とか、「幼児は自分たちが会った魚の種類や名前など、興味を持ったことや生活に溶け込んでいる内容だと、知識をどんどん身に付けていくと感じています。一方で、自分の生活と関係がなくなった時点で興味がなくなるので、身近であることはとても大事だと思います。」などが語られていました。



みんなでディスカッション

参加メンバーによる感想は裏面へ！

Phase 2

園での施設見学と語り合い

保育実践論文の受賞園を実際に訪問し、施設見学、園の実践報告会、研究会第1～4回までの振り返りを行いました。実際に園に集まり見学することで、園の子どもや保育者の生活の営みの空気感を感じ取ったり、園の保育者を交えて話し合うことで、議論に広がりが見られました。

みんなで園を訪問

● 2020年度に保育実践論文の最優秀賞を受賞した「幼保連携型認定こども園 やかまし村」に訪問しました。やかまし村では、保育実践論文の実践が生まれた環境を、園長先生のお話を聞きながら見学した後、子どもたちが園や園の周辺の環境と深く関わりながら生活を営む様子の実践報告をしていただきました。



園を訪問・見学

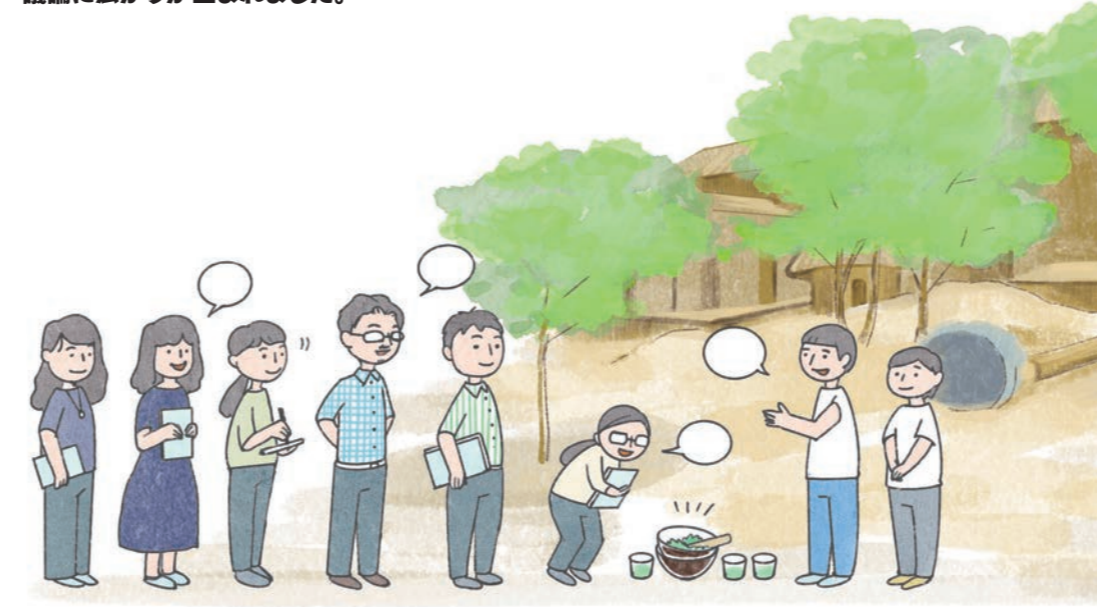
園の先生方も対話に参加

● やかまし村の見学のあと、姉妹園で研究会メンバーの藤澤先生が所属する「幼保連携型認定こども園 みどりの森」を訪問しました。環境を見学した後、やかまし村・みどりの森の保育者も交えて、研究会の第1～4回までの振り返りを行いました。園の保育者からは、最近小学校でも子どもたちの興味や問いを大切にた授業があること、報告があった一方で、幼児教育と小学校教育での言葉の使い方の違いに課題があることなどが挙がっていました。



園の先生方も参加して語り合い

参加メンバーによる感想は裏面へ！



子どもが遊びで使う道具や自然物

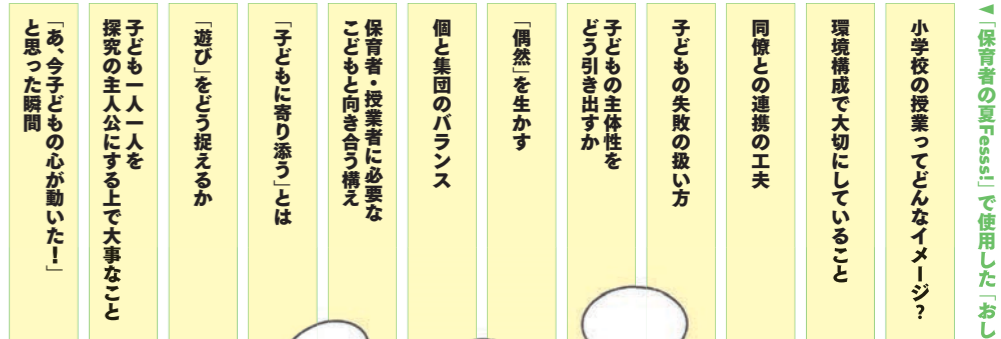
Phase 3

園や学校での保育者・小学校教員との対話

「この活動をもっと様々な場所で、多くの人に広げていきたい」という思いから、メンバーが各地域の園や学校などを会場にイベントを開催し、保育者と小学校教員の対話の場を創り出してきました。それぞれの地域で子どもの姿や連携の悩みなどを話し合うことで、まなざしがつながる大切さと仲間が増える喜びを感じられる場となっています。

おしながきを使った対話

● ソニーグループ本社で開催した「保育者の夏Fesss!(フェス)」(2023年7月)に、つながるまなざし研究会のブースを出展し、幼保小のつながりについて参加者と語り合いました。論文を読み対話する中でよく出てきた言葉をメンバーが整理して作成した「おしながき」から話してみたいキーワードを選んでもらい、メンバーと参加者が対話するなかで、幼保小のつながりに期待する仲間の輪が生まれてきました。



「おしながき」を使った対話

園や小学校での実践発表

● 2023年8月やかまし村に近隣の園や、宮城県内の小学校の先生方が集まり、交流会をしました。こども園での生活の様子を参観したあと、こども園と小学校の実践発表を聞き合いました。「科学する心」を共通言語として幼保小のつながりについて協議しました。新しい出会いが生まれ、つながりが広がっていききました。
● また、全国小学校理科研究協議会研究大会神奈川大会(2023年11月 横浜市立立野小学校)で、「幼保小連携勉強会」を分科会として開き、藤澤先生が保育実践を発表し参加者の小学校の先生と語り合いました。参加者の中には「小学校1年生の学びについて考え直すきっかけになった」と仰っている方もいらっしゃったようです。
● 2024年3月には、福島市立三河台小学校では、「幼保小つながるまなざしカフェ」を開き保育者や小学校教員に加え、園長先生や自治体職員、大学生、大学教員など様々な立場の人が集まりました。幼稚園と小学校の、子どもの姿を中心とした実践発表を聞いたあと、おやつや飲み物をいただきながら、発表の内容や「おしながき」の内容などについて、リラックスした雰囲気の中でじっくりと語りあいました。



小学校での保育実践発表

参加メンバーによる感想は裏面へ！

「つながるまなざし研究会」の活動後の、参加メンバーの感想

研究会を発足した時は、どのような会になるのか、何が生まれてくるのか未知数でしたが、話し合いを重ねる中で「科学する心」のつながりがどんどん見えてきて、語り合う楽しさ・おもしろさが溢れる研究会になっていきました。メンバーの感想から、幼保小のつながりや「つながるまなざし研究会」の楽しさを感じてみてください。

Phase 1

「保育実践論文・教育実践論文を読んで語り合う」の感想



幼児教育の実践、圧巻です。小学校で目指していることがぎゅっとつまっていました。「遊び」が「学び」になっている。心が動く授業は、「遊び」感覚でやっているのかもしれない。そして、幼児教育の先生方は、個の見取りがすごい。子どもの背景を含めてみることで、ありのまま受け入れて、寄り添っている姿に感銘を受けました。時間と人数を言い訳してきた自分を反省。子どもと共に浸る授業をしたいと思いました。●**境孝**（小学校）

小学校と幼児教育に「感情や感覚が大事」という共通点が見つかりました。子どもが自分と身の回りの世界を結びつけていき、段々世界が愛おしくなって、身近な世界の見え方が変わっていく。そして、世界に興味を持ち、意欲をもって取り組むことが大事なのだ、とわかりました。さらに、小学校の学習でも予め決められた内容だけでなく偶然や失敗も取り入れていて、学ぶプロセスの中での試行錯誤の自由があると知り、嬉しくなりました。●**中岡雄介**（園）

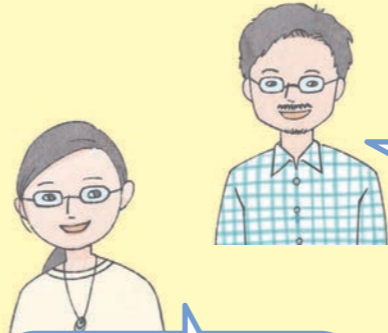


論文の中の小学校では、子どもの興味に合わせて柔軟に時間を組み替えたり、ある単元に多くの時間を使うなどしており、これまでの小学校教育への印象が変わりました。また、授業が自分たちの興味関心から始まることで、主体的に学び、もっと知りたいと探究が繋がっていく様子を知ることができました。幼児教育が目指している主体的な遊びを通じた学びと、ひと続きにあることが感じられました。●**藤沢友香子**（園）

小学校での授業をはじめとした教育活動についてお話しすると、幼稚園やこども園の先生方に「小学校教育も幼児教育も、大切にしていることは変わらないですよね！」と共感していただけたことがうれしかったです。その対話の中で見いだした『子どもの主体性』の捉え方『「遊び」を通して学ぶ意義』『授業者・保育者の役割』などの様々なキーワードは、自分自身の授業観や子ども観を問い直す上で欠かせないものになりました。●**野口卓也**（小学校）

Phase 2

「園での施設見学と語り合い」の感想



すぐ近くに川や畑、田んぼ、森があり、自然と一体化した園環境に驚きました。子どもたちは、その環境の中で魚釣り、植物の活用など、様々な文化を使って遊んでいて、自然の中で文化を通して遊ぶことで子どもたちがいきいきと育っている様子が分かりました。自園とは異なる環境だったので、これまでの私の「遊び」や「環境構成」という概念の定義が自分の中で更新されたような気がしました。●**中岡雄介**（園）

幼児教育における「環境構成」の緻密さやダイナミックさに驚きました。子どもが自ら動き出したくなる場や環境をつくることの大切さを学びました。また、子どもと一緒に遊んだり、後ろで見守ったり、子どもが動き出すまでじっと待ったりといった、保育者の子どもへの振る舞い方も勉強になりました。小学校では、子どもに直接的に働きかけすぎないかもと、改めて自分たちの授業実践を見つめ直すよい機会になりました。●**野口卓也**（小学校）



園には、穏やかな空気が流れていました。環境を見ているだけで、子どもの活動を感じることができ、現場に来ることは大切だと実感しました。園長先生のお話がとても素晴らしかったのですが、同じ熱さで先生方が子どものことを語ってくださいました。子どもの「やりたい!」を実現できるよう、環境を整え、対話をする先生方。大切なことは、幼児教育も小学校教育も一緒ですね。●**實来生志子**



Phase 3

「園や学校での保育者・小学校教員との対話」の感想



つながるまなざし研究会で議論して「おしながき」としてまとめたことについて、話し合うブースを設けました。「目指す方向は同じですね!」小学校の先生と話せてよかった!という声がたくさん聞かれました。自分自身も繋がりが広がり、「まなざし」が広がることに、やっぱり「つながる」なあと改めて感じました。この夏フェスを通して、もっとつながりたいと思ひ、本校での幼小連携の企画等考えて実行することができました。●**境孝**（小学校）

立野小の子どもたちが目を輝かせながら、自分たちの学んだことについて語っている姿に感動しました。実際の子どもの姿を見たからこそ、伝わってくることであり、実際に授業を見ることができて本当に良かったと思います。また、実際に小学校の先生方と交流する時間があり、その中で幼児教育から学びたいと言ってもらえたことは、本当に嬉しかったです。目指しているところは同じなのだ!と感じることができました。●**藤沢友香子**（園）

あなたの園・学校でも、
こんなことを考えて
語り合ってみませんか？



秋田 喜代美

「うんうん、ほんとう、なるほど」「私もここが心が動いた、面白いね」や「**さん
の話につながるけれど、園、学校でもこのエピソードみたいにこんな子がいたよ
」「この場面ではきっと子どもたちはこんなこと感じたのでは、こういう経験がこう
つながるね」などワクワクを脱力してつぶやきながらつないでみてはどうでしょう。
まなざしを共有して育ての心につながるといいですね。



竇来 生志子

「子どもの考えるチャンスを奪わない」ということが園でも学校でも大切だと思
います。例えば、1年生のアサガオセット。どんな花が育てられるかな。どのくらい
の植木鉢がいいかな…。園での経験や知恵を出し合いながら自分で考えて取り
組めるように変えていきたいですね！

今後の活動

- これからも、論文を読み「科学する心」を共通言語として議論し、「まなざし」を磨いていきます。さらに、園や小学校で幼保小の先生方が集まって保育や授業を見合い、議論する研究会を開いてこの研究会での成果を広めていきます。それとともに仲間を増やしていきたいと考えています。
- 小学校の先生と、園の先生が「科学する心」を共通言語として、気軽に自分たちの実践や、心が動かされた子どもの言葉や行動を伝え合い、お互いの思いを肌で感じる機会を作っていきたいと思います。

「つながるまなざし研究会」へのお誘い

- 「つながるまなざし研究会」では、幼保小の先生が「科学する心」を切り口にして子どもの育ちについて語り合っています。
「幼稚園って、ただ好き勝手遊んでいて楽でいいよなー」と思っている小学校の先生！「小学校って、1年生を赤ちゃん扱いするんだよなー」と思っている幼稚園、保育所、こども園の先生！お互いに話して理解し合うと、共感・共有できることがたくさんあります。
- みなさんも、一緒に立場の違いを越えて語り合ったり学び合ったりしませんか？

つながるまなざし研究会のこれから

研究会のメンバーや、つながるまなざしイベントに参加してくださった方が、実践論文・実践報告と自分の園・学校の子どもの姿を重ねながら語りあい、笑ったり頷いたりじっと考えたりする様子から、「科学する心」という共通言語によって、子どもたちへのあたたかいまなざしが幼保小でつながっていくのを感じました。これからこのつながりをさらに広げていきたいと思っています。● 箕輪 潤子



「つながるまなざし研究会」ウェブサイト

これまでの研究の様子や、ご参加いただけるイベント情報などを掲載しています。
本リーフレットのダウンロードもできます(無料)。

